ペペは何時ものように運転に終始した。とりわけ考えるためには夜だ、ソフィアがポルセラノサの公爵の命を受けて働いているのは間違いない、ヘスス オネトが真実何を望んでいるのか知りたいために、チェマ エステベスを誘惑した。つまり、公爵はヘススの調査を心配したのだ。この件は多分金に関係が有る、おそらく外国為替への逃避の問題であり、すぐにソフィアは新しい役割につかねばならなかったのだ。つまりソフィアは同じホテルに居て何日か見張っていたのだ。
ホテルに着いた時ペペは受け付け係りに、もしかしてモデナのソフィアはこのホテルに滞在し続けているか質問をした。係りは勿論大よそ１か月位い逗留していると答えた。ペペは１万ペセタ紙幣をカウンターに置き、目配せながら彼女の部屋の番号を尋ねた。受け付け係りは微笑を浮かべて紙幣を受取った。
―３０１号室です。
ペペはスシを彼女の部屋に伴った。
―スシ、明日の計画、明日の朝は早く起きて。不平を言わないで。もう、すごく遅いのが分かっているが、早起きをしないとね。私達はソフィアを監視しないとね。出来れば彼女の部屋に入って何か見付けないとね。
―ボス、スペイン人女性にとって、貴方の魅力は素朴な私立探偵です、しかし最近はとてもアメリカ人的な発想（企画）ですね。
―君も、勿論アメリカ人の発想で公爵をナンパして...お休みなさい。

★　★　★　★